人間文化創成科学論叢　第11巻　2008年

日本における韓国人父母の言語教育観

――父母の日本滞在歴と子どもの教育レベルを中心に――

朴　　貞　玉*

The Korean Parents' Views of Language Education for Their Children in Japan

—Focusing on the Parents' Staying Period in Japan and the Children's Education Level—

PARK Jungok

abstract

The purpose of this research is to examine the views of Korean parents for their children's language education in Japan, through the questionnaire method. The 369 Korean parents living in Japan are asked what language they expect their children to acquire. As a result, the answers are categorized into four types: "Korean"; "Japanese"; "Bilingualism (Korean and Japanese)"; and "Trilingualism (Korean, Japanese and English)". Moreover, the parents are divided by the staying period in Japan, which are "The Long Stay" ; "The Mid Stay" ; and "The Short Stay" , and it is shown that "The Long Stay" parents prefer Bilingual for their children to be, more than "The Mid Stay" ones.

However, there is no significant relation between the children's educational level and the parents' thoughts.

Keywords : the views of language education, parents' attitudes, education strategy, child's education, language choices

1．はじめに

近年、グローバル化の進行により日本国内においても就労や定住のために来日する外国人の数は年々増加現象を見せている。韓国外交通商部（2005）によると、海外へ出ている韓国人の数は、2005年現在、6,638,338名に達しており、その中でも日本在住の韓国人は中国、アメリカについで３番目に多く、901,284名である。そのうち永住者は515,570名、一時滞在者が284,840名であると報告している。

このように日本在住の韓国人は数多く、中でも子どもと一緒に来日している韓国人父母たちの中心的関心事は「子どもの教育をどうするのか」という問題である。日本で子育てをする父母たちは自分たちと同じ立場に置かれている他の父母たちの子どもの教育に関する情報が得にくく、日本の生活での大きな悩みの一つである。このように、大勢の韓国人父母たちが「子どもの教育」について悩んでいること自体がこの問題に対する決定的な対策がないことを意味している。また、年少者の言語能力は年少者本人だけの問題ではなく、その年少者と密接な関係にある教師や保護者の意識とも関連する。なぜなら、教師や保護者は順応性の高い年少者の言語能力の伸張

キーワード：言語教育観、父母の意識、教育戦略、子どもの教育、言語選択

＊平成20年度生　比較社会文化学専攻

を左右する重要な存在だからである。

そこで、本研究では、日本における韓国人保護者に焦点を当て、日本で子育てをしながら言語教育をどのようにすべきかという言語に対する父母の教育観(言語教育観)に着目し、その現状と課題を明らかにしていきたい。ここで言う韓国人父母の言語教育観とは、日本で子育てをするに当たって自分の子どもの言語はどのような言語にするかという父母たちが希望する子どもの言語選択のことを意味している。子どもの言語選択は、母国の韓国人父母にとっては不必要に思われるが、日本にいる韓国人父母にとっては必要不可欠になると考えられる。

2．先行研究と研究目的

2.1.　外国人保護者の言語教育観に関する研究

日本滞在の外国人保護者を対象とした子どもの教育に関する研究は、方法論として、質的、量的調査が行われている。また、子どもの言語面、生活面、心理面などについて保護者（父母）たちの意識に焦点をあてた研究はこれまであまりなされてこなかったが、僅かながら散見されている。例えば、外国人保護者の言語教育観を調査した石井（2000)、志水･清水ら（2001)、朱（2002）などがある。

石井（2000）は、各都県の教育委員会を通じて選定した、主として関東甲信越地方の小学校･中学校131校（公立）に在籍する、ポルトガル語を母語とする外国人児童生徒の父母369名を対象に、言語教育に関する意識調査を質問紙調査法で行った。その結果、父母の言語教育観については、日本と母国の二文化･二言語に接する子どもたちがどちらの能力をも充分に発達させることを重視していることが明らかになった。つまり、日本語習得のみを重視して、母語の喪失、母国の人との疎遠化に強く反対しているため、学校で日本語学習を行うと同時に、家庭では母語に接する機会をできるだけ多く持つことが二言語の発達のために良いことであると考えている。さらに、二言語をともに伸ばしていくことがひいては教科学習にも好影響を及ぼすという明確な信念が見られた。

志水･清水ら（2001）は、日系南米人の言語教育観を検討した。調査対象である29家族の国籍別内訳はブラジル22家族、ペルー４家族、ボリビア２家族、パラグアイ１家族で、いずれも子どもを公立学校に通わせている。彼らの言語教育観を見てみると、基本的に母語・母文化の伝達に関しては積極的で、家庭で母語を使用する他、ビデオ・新聞・雑誌などの母語メディアを利用した環境づくりをしているという。このように、日系南米人の日本での子どもの言語教育観は、積極的な母語・母文化の継承が強く、市場価値のある言語習得を重視していると述べている。さらに、志水･清水ら（2001）の研究では、韓国系ニューカマーたちを対象に教育戦略の調査を行っており、その中での言語教育観に関する主な結果は以下の通りである。対象者の韓国系教会に通うクリスチャンたち21家族は、新来した韓国人のなかでも比較的高い階層に属する人々であると位置づけることができ、「家庭での母語使用･文化伝達」についてはきわめて積極的な姿勢を示していて、同化主義的ではない二文化主義的な姿勢が認められた。帰国見通しの有無に関わらず、多くの家庭で子どもに韓国語を教えているとともに、学齢に応じた韓国の教科書を使い、ハングルの完全な習得を求めているという。親たちは、韓国語を身につけることが、自文化を保持するという意味を持つのみならず、ステップアップの道具として有効であると考えていると報告されている。

最後に朱（2002）は、子どもを公立小学校へ通わせる韓国人の保護者14名に対し、バイリンガリズムの観点に立って韓国語と日本語の二言語を併用する環境にいるニューカマーの子どもたちの二言語能力を調べた。その中で親の言語教育観に関しては、自分の子どもに母語（韓国語）を継承させたいという意識が高く、そのために母語保持の努力をしていると報告されている。まず、家庭では徹底的に韓国語を使用すること、韓国語との接触量を増やす方法として読書や読み聞かせを重視すること、日ごろの韓国語の勉強を通信教材や学習誌を用いて親や兄弟が教えていることなどがあげられている。また、韓国語での教科学習をさせている親もほぼ半分くらいを占めていて、特に言語能力の高い子どもは毎日行っている傾向があると報告している。

2.2.　研究目的

上記のように、どの国の親も言語教育に対して熱心であることが窺える。しかし、これまで韓国系ニューカマーの家族を研究対象とした研究は、研究そのものが非常に少なく、韓国人保護者たちの意識だと総括して言う

ことは難しい。また、どのような両親の意識から言語教育観が生まれているのかを明らかにした研究は未だ見つからない。

従来行われてきた韓国系ニューカマーの家族に関する調査は、そのほとんどが日本の公立学校に子どもを通わせる家族を対象にしたものであったため、韓国学校に子どもを通わせる家族については、一面的な見方をされることが多かった。しかし、韓国学校も日本における学校であり、子どもを韓国学校に通わせる保護者のすべてが同じ意識を持ち、同じ言語教育観を持っているとは考えにくい。また、韓国人保護者を対象とした研究の全ての対象者の来日歴は、平均５年から10年以上といった長期滞在者であったため、短期、中期、長期それぞれの滞在種類別の言語教育観の比較ができない状況である。

このようなことを踏まえて、本研究では、韓国学校に子どもを通わせる父母たちを対象に言語教育観について量的に検討していくことを目的とする。

３．研究課題と方法

3.1.　研究課題

上記の研究目的を明らかにするために、特に父母の言語教育観に影響を与える要因として父母の日本滞在歴と子どもの教育レベルに焦点を当てて、次の研究課題を設定する。

研究課題１：韓国学校に子どもを通わせる父母たちが持つ言語教育観はどのようなものなのか、「言語教育観」の構造を明らかにする。

研究課題２：父母たちの言語教育観は父母の日本滞在歴[1]、短期、中期、長期、それぞれどう違うか。

研究課題３：父母たちの言語教育観は子どもの教育レベル（小、中、高）によって差があるか。

言語教育観は生活環境の影響を受けやすく、特に父母の日本滞在歴と子どもの教育レベル（学年）との影響が強いと考えられる。年少者言語教育の先行研究の中では、父母の日本滞在歴と言語教育との関連が強いことが明らかにされている（伊東・1999、内田・1999、朱・2002）。このように、父母の日本滞在の予定に合わせ自分の子どもの将来のことを考えることは、言語教育観に直接に影響を与えると考えられる。また、箕浦（1994）は異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ形成は子どもの年齢と深く関連があることが示された。従って、子どもの成長に合わせて言語教育観を変えていくことも子どもに対する父母の言語教育観に影響を与える可能性が考えられる。

3.2.　研究方法

3.2.1.　調査対象者

2007年７月から８月にかけて、東京韓国学校の父母たちを対象に同校の全生徒約900人に質問紙を配布、回収した。兄弟で韓国学校を通わせる家庭もあり、総家庭の数としては約500家庭であるため、配布のとき一家庭一部を提出することを指示した。回収率は80％であったものの、回答に著しく不備があったものを除いた結果、有効回答数は369部であった。回答者は全員韓国人・韓国籍の父母であり、記入者は父33（8.9％）人、母293（79.4％）人、両親９（2.4％）人、無回答34（9.2％）人である。

3.2.2.　分析方法

まず、韓国学校の父母369名の子どもに対する「言語教育観」の構造を把握するために因子分析を行った。主因子法で初期解を求めた後、固有値１以上で因子の数を決め、バリマックス回転を行った。各因子において.40以上の因子負荷量を示すものを基準に因子の解釈を行い、負荷量の低いものや複数の因子にまたがって負荷量が高いもの、さらに解釈不能なものを除外した。また、逆転項目となる質問に関しては尺度得点の平均値を出す数式のほうで逆転項目の処理を行った。

さらに、韓国学校に子どもを通わせる父母たちの「言語教育観」は父母の日本滞在歴が短期、中期、長期によってそれぞれどのように違うか、子どもの教育レベル、小、中、高それぞれによってどのような差があるかを検討するために、父母の「日本滞在歴」と「子どもの教育レベル」ごとに分散分析を行った。分析にあたっては、研

究課題１で明らかになった言語教育観の因子それぞれの下位尺度に含まれる項目の単純加算平均値を算出して尺度得点とし、従属変数として用いた。また、それぞれの３つの父母の日本滞在歴（短期、中期、長期）と子どもの学校での教育レベル（小学生、中学生、高校生）を独立変数として用い、一元配置分散分析を行った。さらに、有意差の見られた項目については多重比較を行った。

4.　分析結果と考察

4.1.　研究課題１の分析結果

＜韓国学校に子どもを通わせる父母たちの「言語教育観」の構造＞

課題１では、韓国学校の父母369名全体の子どもに対する「言語教育観」の構造を把握するために因子分析を行った結果、Table1のとおりになった。それぞれの因子の下位尺度得点ならびに項目内容を表に示した。

Table 1　韓国学校の父母の言語教育観―因子分析の結果

	因子			
	1	2	3	4
第１因子　トライリンガル重視				
グローバル的な今の社会を思うと子どもの英語教育は当たり前だと思う。	**0.758**	0.206	0.094	-0.038
子どものときから英語に接しておくことは英語に対する親近感が生まれ英語習得によりよい影響を及ぼすと思う。	**0.702**	0.097	-0.008	-0.061
子どもの教育の中で英語はいずれ必要となるので早い段階から習わせる必要性があると思う。	**0.609**	0.125	0.005	-0.021
国際人になるためには英語は必要不可欠な言語であると思う。	**0.594**	0.257	0.070	-0.138
子どもの将来のことを思うと韓国語と日本語はもちろん英語も使用できるような教育方針をとったほうがいいと思う。	**0.592**	0.353	0.072	-0.055
第２因子　バイリンガル重視				
韓国語と日本語がいろいろな領域で広く使えることは重要であると思う。	0.273	**0.766**	0.031	-0.031
韓国語と日本語を自由自在に使い分けたほうがいいと思う。	0.104	**0.456**	0.051	-0.027
韓国語と日本語が偏りなく使えることは重要であると思う。	0.170	**0.428**	0.048	0.034
韓国語と日本語が会話力でも読み書きの能力でも高度に発達していることが望ましいと思う。	0.345	**0.414**	0.130	-0.085
第３因子　韓国語重視				
外での子どもとの韓国語使用に対して私は違和感がないと思う。	0.032	0.259	**0.705**	0.082
外での子どもとの韓国語使用に対して私は違和感があると思う。	0.036	-0.073	**-0.633**	0.099
外での子どもとの会話は日本語のほうがいいと思う。	0.008	0.187	**-0.550**	0.337
外での子どもとの会話は韓国語のほうがいいと思う。	0.162	0.050	**0.505**	-0.023
第４因子　日本語重視				
日本にいるのだから韓国語を忘れることにあまり神経質になる必要はないと思う。	-0.013	-0.171	0.005	**0.573**
日本で生活するには、まず日本語を学習することが必要で、韓国語のことはあまり考えなくても支障はないと思う。	-0.194	-0.027	-0.065	**0.559**
日本語が早く上達するように家庭では日本語を使ったほうが良いと思う。	-0.006	0.085	-0.085	**0.451**
寄与率（％）	**15.2**	**9.7**	**9.4**	**6.3**

第１因子は「グローバル化する今の社会を思うと子どもの英語教育は当たり前だと思う」「子どものときから英語に接しておくことは英語に対する親近感が生まれ英語習得によりよい影響を及ぼすと思う」「子どもの教育の中で英語はいずれ必要となるので早い段階から習わせる必要性があると思う」「国際人になるためには英語は必要不可欠な言語であると思う」「子どもの将来のことを思うと韓国語と日本語はもちろん英語も使用できるような教育方針をとったほうがいいと思う」の５項目から成り、いずれも国際的な環境と二つ以上の言語を重要視していることから＜トライリンガル重視＞と命名した。

第２因子は「韓国語と日本語がいろいろな領域で広く使えることは重要であると思う」「韓国語と日本語を自由自在に使い分けたほうがいいと思う」「韓国語と日本語が偏りなく使えることは重要であると思う」「韓国語と日本語が会話力でも読み書きの能力でも高度に発達していることが望ましいと思う」の４項目から成り、どれも韓国語と日本語の両立を重要視していることから＜バイリンガル重視＞と命名した。

第３因子は「外での子どもとの韓国語使用に対して私は違和感がないと思う」「外での子どもとの韓国語使用に対して私は違和感があると思う」「外での子どもとの会話は日本語のほうがいいと思う」「外での子どもとの会話は韓国語のほうがいいと思う」の４項目から成り、そのうち「外での子どもとの韓国語使用に対して私は違和感があると思う」と「外での子どもとの会話は日本語のほうがいいと思う」の項目は逆転項目として抽出された。これらは「外での子どもとの韓国語使用に対して私は違和感があると思わない」、「外での子どもとの会話は日本語のほうがいいと思わない」の意味になる。いずれも韓国語使用に違和感がないことと韓国語を中心に使用することを重要視していることから＜韓国語重視＞と命名した。

第４因子は「日本にいるのだから韓国語を忘れることにあまり神経質になる必要はないと思う」「日本で生活するには、まず日本語を学習することが必要で、韓国語のことはあまり考えなくても支障はないと思う」「日本語が早く上達するように家庭では日本語を使ったほうが良いと思う」の３項目から成り、どれも韓国語より日本語を重要視していることから＜日本語重視＞と命名した。

以上のように、韓国学校の父母の子どもに対する「言語教育観」は＜トライリンガル重視＞＜バイリンガル重視＞＜韓国語重視＞＜日本語重視＞の計４因子から構成されることが示された。

以上の結果について項目の信頼性を検討するため、因子ごとにクロンバックのα係数を求めたところ、第１因子＜トライリンガル重視＞はα＝.804、第２因子＜バイリンガル重視＞はα＝.622、第３因子＜韓国語重視＞は＝.634、第４因子＜日本語重視＞はα＝.524とそれぞれ一貫性が認められた。ただし、第４因子のみ項目の数が少ないこともあり係数の値が低くなったが、因子を構成する３項目の内容は妥当であるため、本研究の分析に含めることにする。

4.1.1. 研究課題１の考察

これら４因子は、子どもの言語教育をどのようにさせたいのか、親たちのそれぞれの立場によって自分の子どもに対する「言語教育観」の考え方が４つに分けられたと考えられる。

第１因子である＜トライリンガル重視＞では、韓国語・日本語・英語という３つの言語を重要視していることがわかる。「韓国語は、子どもの母語であるということもあって基本的にできるようにさせたい」、「日本語は、せっかく日本に住んでいる恵まれた環境の中でいるのでどうせならばできるようにさせたい」、「英語は、グローバル化している現状と受験での避けられない必修言語になっているのでこれからの子どもの将来のことを思うと英語もできるようにさせたい」という親たちの高い希望が含まれていると考えられる。

第２因子である＜バイリンガル重視＞では、韓国語と日本語の両言語を重要視していて、母語である韓国語も生活場の言語である日本語もどちらに偏った水準のレベルの言語能力ではなく、それぞれの言語を流暢に使い分ける言語能力を子どもたちに持って欲しいとの親たちの考え方が窺える。

第３因子である＜韓国語重視＞では、家庭ではもちろん外でも韓国語を使うことを重要視していることから、韓国人である以上しっかりした母語を身に付けて欲しいとの親たちの強い願いが込められていると言えるだろう。

第４因子である＜日本語重視＞では、韓国学校に通わせているということで韓国語に対する不安はそれほど高くない反面、学校は韓国学校へ通わせていても実際には日本で生活をしている彼らにとっては日本語が必要不可

欠な言語になるのは当然のことだと考えられることから、親たちは日本語を重視していると思われる。

4.2. 研究課題 2 の分析結果

＜韓国学校に子どもを通わせる父母たちの「言語教育観」と父母の日本滞在歴、短期、中期、長期による違い＞

課題 2 では、韓国学校に子どもを通わせる父母たちの「言語教育観」は父母の日本滞在歴が短期、中期、長期によってそれぞれどのように違うかを検討するために、3 つの父母の日本滞在歴（短期型：1 ヶ月～ 3 年未満、中期型：3 年～ 6 年未満、長期型：6 年以上）を独立変数、言語教育観の 4 因子を従属変数として、一元配置分散分析を行った。分散分析の結果を次の Table2に示す。

Table 2　分散分析―父母の日本滞在歴×言語教育観の 4 因子の平均値

	Ⅰ短期型 (N=106)	Ⅱ中期型 (N=83)	Ⅲ長期型 (N=164)	F 値	多重比較
1．トライリンガル重視	4.375	4.426	4.276	2.108	
2．バイリンガル重視	3.995	**3.958**	**4.164**	**4.179***	**Ⅲ＞Ⅱ＊**
3．韓国語重視	2.892	3.018	2.958	2.188	
4．日本語重視	1.741	1.586	1.668	1.544	

＊p＜.05

分散分析の結果、父母の日本滞在歴による言語教育観の違いが有意であったのは、〈バイリンガル重視〉（F(2.350)＝4.179、p＜.05）の 1 つの因子であった。有意差の認められた 1 つの因子について、さらに Tukey(T)法を用いた多重比較を行ったところ、＜バイリンガル重視＞では『中期型』(平均値3.95：以下カッコ内は同様に小数点第 2 位までの平均値を表す)と『長期型』(M＝4.16) との間に有意差があることが明らかになった。一方、＜トライリンガル重視＞、＜韓国語重視＞、＜日本語重視＞である 3 つの因子においては、父母の日本滞在歴による有意な違いは認められなかった。

4.2.1. 研究課題 2 の考察

＜言語教育観と父母の日本滞在歴による違いのみられた因子＞

父母の『日本滞在歴』の分析においては＜バイリンガル重視＞の言語教育観の因子で有意な違いが確認された。以下、考察を行う。

この因子では『長期型』の平均値が『中期型』のそれを有意に上回っていることから、【長期型の親は中期型の親よりバイリンガルを重視する】と解釈することができる。母語である韓国語をしっかり勉強させたいという気持ちが強い親はやはり長期型に多いだろう。しかし、母語にだけこだわっていられないのも長期型の親たちで、子どもの日本での生活のことも同時に考えなければいけない。日本で生活をする上で一番基本的に必要とされるものは日本語である一方、自国の言葉も忘れさせたくないため、親たちはバイリンガルの言語教育をさせたいと考えるのが自然なのかもしれない。バイリンガルというと、1960年代の半ばまでは、学業不振、精神錯乱、情緒不安定と結び付けられていた。最近は逆に、バイリンガルに育つことが知的な発達をより刺激し、思考の柔軟性や創造力を高め、言語感覚を鋭くし、異文化理解を深め、第 2 、第 3 のことばの習得に役立つと言われ、かえって一つのことばしか使えないモノリンガルのマイナス面が目立つ時代になってきた（中島、1998)。

このように、日本に長く住めばすむほど母語喪失が心配になるだけではなく、長期型のほとんどがいつまで日本に滞在するかがわからない場合が多いため、日本での生活も無視できない状況になっている。したがって、父母たちは子どもにどれか一つの言語を中心に言語教育を行うわけにはいかなくなってくるのだろう。

4.3. 研究課題 3 の分析結果と考察

＜韓国学校に子どもを通わせる父母たちの「言語教育観」と子どもの教育レベル、小、中、高による差異＞

課題 3 では、韓国学校に子どもを通わせる父母たちの「言語教育観」は『子どもの教育レベル』小、中、高それぞれによってどのような差があるかを検討するために、3 つの子どもの学校での教育レベル（小学生、中学生、

高校生）を独立変数、言語教育観の４因子それぞれの下位尺度に含まれる項目の単純加算平均値を算出した尺度得点を従属変数として、一元配置分散分析を行った。その結果、子どもの学校での『教育レベル』による言語教育観との有意な差異は何も認められなかった。

このことは色々な背景から考えられる。まず、子どもの外国語の導入は一般的に初期教育のほうが言語習得への好影響を及ぼすと考える親たちがいるため、彼らは子どもたちに早い段階で言語接触を行ったほうが有利だと考えるのだろう。このような考え方を持っている親たちは主に英語を重視する傾向があると考えられる。また、子どもによっては来日する時期がそれぞれ異なるため、来日したその時点で言語教育を中心とした教育方針をとろうとしている親たちもいるだろう。このような場合、親たちは主に日本語を重視することが考えられる。さらに、一つ以上の言語教育は子どもに負担をかけ、どの言語も上達しないセミリンガルになる危険を心配する親たちもいることも考えられる。このような場合は母語の韓国語を重視することが考えられる。

このように、親たちは、小学生からは何語、中学生、高校生からは何語といった教育レベル別に言語教育を考えるのではなく、何語を教えるにせよ、来日時や、子どもの状況に応じて言語教育方針をとろうとしていることが窺える。英語は小学生になる前の幼児期から、日本語は日本に来日したその時点から、韓国語は時期を考慮せず、それぞれの言語学習を採用している。したがって、言語教育観が教育レベルによる影響がなかったと考えられる。

５．総合的考察

5.1. 結果のまとめ

本研究では、子どもを韓国学校に通わせる父母を対象に、子どもに対する言語教育観の概念構造を明らかにし、さらに、言語教育観に影響を及ぼす要因とする父母の日本滞在歴と子どもの学校での教育レベルとの関連を検討した結果、以下の３点のことが明らかになった。

１）韓国学校に子どもを通わせる父母たちの子どもに対する「言語教育観」の構造は、＜トライリンガル重視＞＜バイリンガル重視＞＜韓国語重視＞＜日本語重視＞の４因子から構成されていることが示された。
２）韓国学校に子どもを通わせる父母たちの「言語教育観」と父母の日本滞在歴、短期、中期、長期による違いにおいて、＜バイリンガル重視＞では、長期型の親は中期型の親よりバイリンガルを重視する傾向が見られた。一方、＜トライリンガル重視＞、＜韓国語重視＞、＜日本語重視＞の３つの因子においては、父母の日本滞在歴による有意な違いは認められなかった。
３）韓国学校に子どもを通わせる父母たちの「言語教育観」と子どもの教育レベル、小、中、高による差異においては、子どもの教育レベルによる言語教育観の有意差は認められなかった。

本研究では、子どもを日本の韓国学校に通わせる父母たちの言語教育観として、韓国人父母たちの概念構造とそれぞれの父母の属性と子どもの属性に分けての言語教育観の関連性を検討した。このように、父母の概念構造から言語教育観を探ることは今までない研究方法で、こういった研究結果は父母たちにとって有益な一つの情報として提供できると考えられる。次は、このような研究結果を踏まえ総合的考察を行う。

5.2. 総合的考察

本研究では、日本の韓国学校に子どもを通わせる父母たちは、日本での滞在期間が長ければ長いほど子どもたちに韓国語と日本語のバイリンガルを重視する傾向が強いということが示された。このようなことは研究課題２の結果である【長期型の親は中期型の親よりバイリンガルを重視する】の分析結果からでもわかる。従って、日本の韓国学校に子どもを通わせる長期型の父母たちの特徴は、日本に長く住めば住むほど日本の同化傾向につながる日本語重視ではなく、韓国語と日本語の二つの言語を重要視するバイリンガル重視型であると考えられる。彼らがバイリンガルを重視する理由としては以下のようなことが考えられる。

第一に、韓国人父母たちは子どもに対する将来の学校（大学）選択の幅を広げるための教育戦略を立てていると考えられる。現在、韓国学校は進学の選択が自由になってきており、日本国内はもちろん本国の韓国でも受験が可能になっている。子どもの成長を見ながら自分の子どもに最も適した学校を選択できるようにしたいという父母の願いが窺える。このように受験の選択が韓国と日本、両方あるということも強く影響しバイリンガルを重視すると考えられる。

第二に、父母たちがバイリンガルを重要視している理由に、子どもの将来をより豊かにしたいという親の願いが込められていることが窺える。将来、子どもが成人したときに自分で多様な世界を選択できるような可能性を残すためにも母国語と日本語の両方を勉強させることは有意義であると親たちは考えているだろう。この場合の世界とは、言語だけではなく最終的には人間関係や文化のことも含んでいる。このような世界が広がることは、即ち自分の子どもの人生が豊かになることだと親たちは思うと考えられる。

第三に、日本に住居しながら子どもを韓国学校に通わせて韓国語を重視している理由としては、母国にいる祖父母や親戚との関わりを大事にしていきたいという親たちの希望が窺える。自分たちは韓国人であるというアイデンティティが特に強い親たちにとっては、生活の場は日本でも母国にいる祖父母や親戚とのやり取りを大切にし、その関係を維持したいと考えるだろう。日本での生活は核家族の生活であり、父母の愛情は受けられるものの祖父母の愛情や親戚とのやり取りから生まれる家族愛というものは感じにくいのが現状である。親たちはそういった家族愛を子どもたちに感じさせたいという思いと同時に、家族を大切にする心を子どもたちに持たせたい思いが併存していると考えられる。

第四に、韓国人父母たちが母語を継承する意識が強い理由としては、自分の子どもと真の会話をするためには母語が必要になるからだと思われる。親子関係に何か起こった場合は真剣に子どもと向き合わなければならないときがある。そのとき、表面上だけの日本語ではなく親の気持ちをありのままに伝えられる言語は親にとっては母語であろう。また、子どもにとっても日本語は来日してから学習するのでお互い完璧に使いこなせる言語能力には達していないことが考えられる。このように、親の思いを伝え、子どもの思いを理解するために母語が占める役割は親子ともに大きいと考えられる。

以上のように、自分たちに置かれている現状から「バイリンガル」といった決して容易ではない教育戦略を韓国人父母たちは選択しているということがわかる。

6．おわりに―今後の課題―

本研究では、日本における韓国人父母たちの言語教育観とそれに影響を及ぼす要因として父母の日本滞在歴と子どもの教育レベルをあげて明らかにしてきたが、それ以外の要因として、父母の来日目的及び来日動機、経済状況などについては明らかにしていない。さらに、この研究では父母たちの言語教育観については明らかになったものの、文化的側面にはまだ触れていない。今後は、異文化で生活している父母の子どもに対する文化的側面に関する意識はどのようなものなのかを検討する必要がある。また、本研究では韓国学校の父母だけに対象を絞ったため、他の学校に通学させている日本在住の父母との言語教育観や教育戦略の比較ができない。従って、日本の公立学校、インターナショナルスクールなどの学校に子どもを通わせる韓国人父母を対象にする必要性がある。今後はこの三つのグループの保護者を対象にインタビューを行ないそれぞれのグループの意識の比較をしていきたいと考えている。

注

1　日本滞在歴：日本出入国管理事務所で定められている滞在別の期間を参考に本研究では短期型を１ヶ月～３年未満、中期型を３年～６年未満、長期型を６年以上と定めることにする。

参考文献

石井恵理子（2000）「ポルトガル語を母語とする在日外国人児童生徒の言語教育に関する父母の意識」『日本語科学』5　pp.116－136　国立国語研究所

石黒広昭（2000）「異文化問題の中にある子どもの言語発達」『月刊言語』７月号pp.76－83

伊東裕郎（1999）「外国人児童生徒に関する日本語教育の現状と課題」『日本語教育』100号

内田紀子（1999）「入国児童をとりまく人々の意識―教師・保護者・日本語指導員の場合―」　お茶の水女子大学修士論文

岡崎敏雄（1998）「年少者日本語教育に関する教師の言語教育観」『日本語科学』４号pp.74－98　国立国語研究所

加賀美常美代（2004）「教育価値観の異文化間比較―日本人教師と中国人学生、韓国人学生、日本人学生との違い」『異文化間教育』19号pp.67－84　アカデミア出版会

志水宏吉、清水睦美（2001）「ニューカマーと教育」　学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって

朱ヒョン淑（2002）「日本語を母語としない児童の母語力と家庭における母語保持―公立小学校に通う韓国人児童を中心に―」お茶の水女子大学修士論文

中島和子（2004）「第二言語としての日本語の獲得と母語の後退―新来ブラジル人小中学生のバイリンガル調査より」『応用言語学研究』６号pp.67－81

西原鈴子（2007）バイカルチュラル家族の子ども―言語獲得と言語運用（特集 バイカルチュラル家族―複数の文化と言語が交叉するところ）『異文化間教育』26号pp.54－60

箕浦康子（1994）異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ『日本教育学会』vol.61,No.3pp.p213～221

Lambert, W. E. (1975) Culture and Language as Factors in Learning and Education. In A.Wolfgang(ed), Education of Immigrant students. Toronto: Ontario Institute for Studies in Education　pp.133－148

注）本研究は2008年３月にお茶の水女子大学に提出した修士論文（「韓国人父母の教育戦略の研究」―日本の韓国学校の父母の場合―）の一部を再検討し、論文として作成しました。